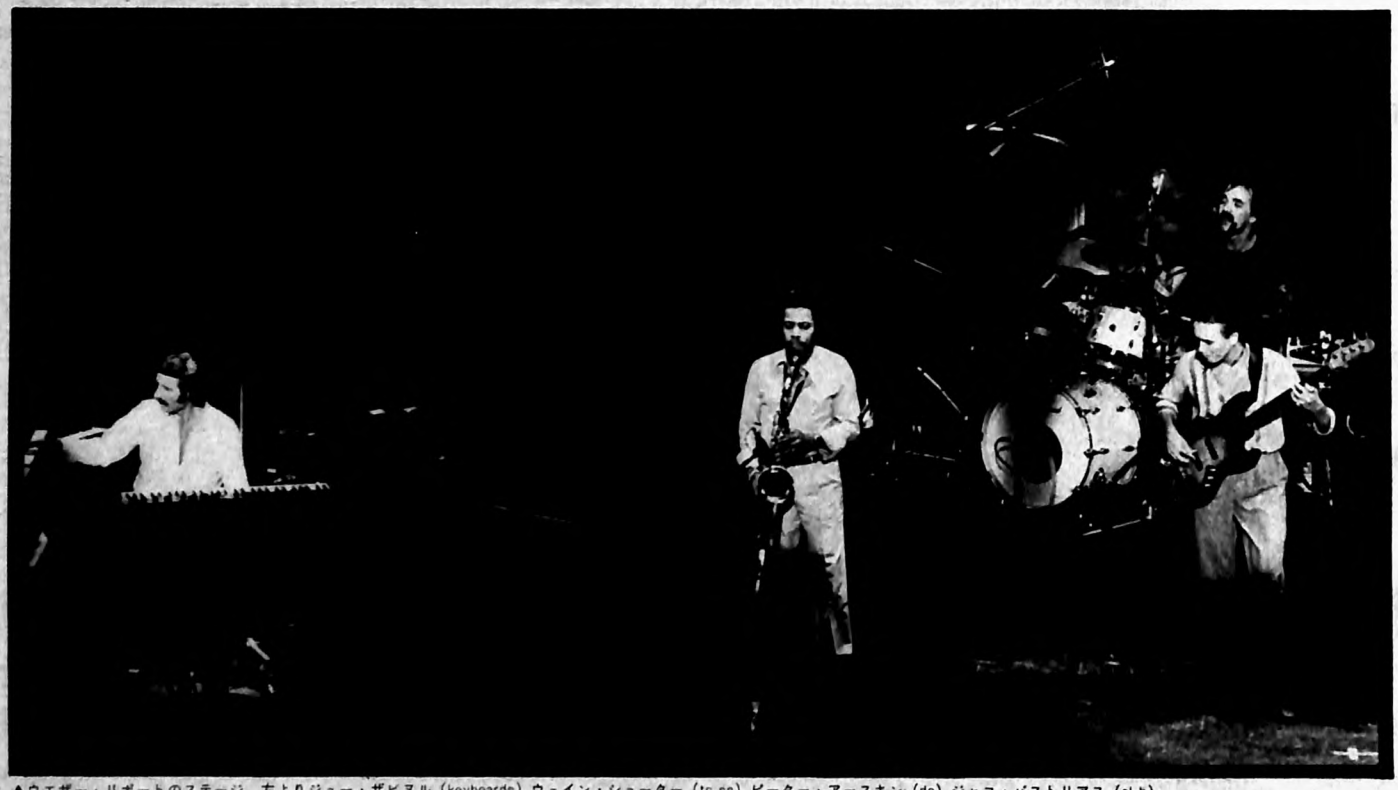
JACO PA

今、世界中に僕よりベースをうまく弾け



▲ウエザー・リポートのステージ。左よりジョー・ザビヌル（keyboards）ウェイン・ショーター（ts,ss）ピーター・アースキン（ds）ジャコ・パストリアス（el.b）

聞き手＝浜瀬元彦（ベーシスト）

●

去る6月ウエザー・リポートの来日で
その驚異的なベース・ワークと
ジョイフルなステージ・アクションで
今迄にないフレッシュな感動を多くのファンに与えてくれた
ジャコ・パストリアス。
前号の来日直前インタビューに引き続き，
今回はジャコの研究に関しては誰にも負けないという日本の
人気ベーシスト＝浜瀬元彦さんがジャコから直接ハーモニクスのこと，
コード・チェンジのこと，教則本のことなどの秘密をききだした。
ジャコ曰く
“こんなに核心をついたインタビューに答えたのは生れて初めてだよ”
だって。
これぞまさしく世界に類をみないジャコ・インタビューの決定版だ。

JACO

浜瀬元彦（以下***MH***と略す）●今まで日本で紹介されたいろいろなジャコのインタビュー読んだけど，あまりインタビューは好きじゃないみたいだね。

JACO PASTORIUS（以下***JP***と略す）●もともとインタビューなんてきらいだよ。僕は僕の音楽で僕の全ての答えを出してるんだ。それに，いつ音楽の勉強はじめたとか，どこの学校行ったかなんて，僕の本質を知ることとはかけ離れた些細なことなんだ。音楽的なことは，プレイで全部答えられてるし…。

MH●それはよくわかる。僕もプロのベース奏者だから，そうは思う。だけど，ジャコの持っているメソッド（方法）を，ある程度「言葉」というもので説明してもらえたら，と思うんだなー。というのも，僕はずーっとあなたを研究してきて，あ

STORIUS

(ウエザー・リポートのベーシスト)

る人はいないよ—ジャコ・パストリアス

▲こんなに細かくインタビューに答えたのは初めてだったよと語るジャコ・パストリアス

なたの演奏にすごくある種のメソッドを感じているが，その内実の謎がとけないでいる。

JP●君もベース奏者だから，この雑誌からインタビュー頼まれたわけだね。

MH●そうだ。聞いてもあまり答えないだろうとは思っていたけど，雑誌のためにテクニカルなことを聞くよう期待されている。

JP●話したっていいんだよ。例えば僕が17才の時に結婚して19才の誕生日の1週間後には，父親になってた。そういう僕の人生が今の僕をこういうミュージシャンにしてるんだ。僕は責任ある人間として生きてきてる。当時金がなくて，とにかく演奏するしかなかったんだ。誰のように弾こうとか，どんなふうに演奏しようとかなんて考えたことないよ。ただ弾かなくちゃ食べられなかったんだから…。だから僕のようにベース弾ける人は，世界のどこを捜してもいないよ。誰も僕の真似できないんだ。

●ロン・カーターは生徒であって僕は先生なんだ

▲「どんな風に僕のベースをコピーしたのか聴かせてほしい」と実際に浜瀬さんにベースをプレイするように頼んだジャコ

MH●あなたがプレイするとき特に右手が不思議なんだよねー。

JP●演奏する時，いちいち考えてないよ。(そういいながら，右手の人さし指と中指を動かしはじめる。)

MH●ほんとに二本指だけで弾くの？

JP●そうだ。

MH●でも例えばソロ・アルバム「ジャコ・パストリアスの世界」(CBSソニー25AP-71) の中の〈トレイシーの肖像〉を聞くとどうしても，二本指だけじゃ解決つかない。

JP●あれは親指も使ってる。僕の親指すごく曲がるんだ。アメリカじゃこういうのダブル・ジョイント(二重関節)って呼んでるけど，実は関節が一つ足りなくてこれだけ曲がるんじゃないかな。

MH●ほんとにあなたのように弾きたいと思っても弾けないんだよね。例えば以前は，僕は，ロン・カーターに熱中してかなり勉強して，ある程度

▲「〈ドナ・リー〉の最後のところはこうさ」と実際に自分のベースをプレイしながらインタビューに答えるジャコとインタビュアーの浜瀬元彦さん

▲浜瀬さんのリクエストに応じて〈ハボナ〉のベース・ラインを書譜するジャコ

▲アメリカ大リーグの中でもフィラデルフィア・フィリーズの大ファンというジャコ。そのフィリーズのキャップをいつも愛用している

▲ジャコがベースの練習の時に使っているDOTZAUERのチェロ教則本

▲ジャコ愛用のフェンダー・ジャズ・ベース。10年前にフロリダの古楽器店で100ドルで買ったという

は彼の方法を学び得た。だけどジャコの場合には，そのジャコ独自の方法というのが誰よりも高度に存在しているということが歴然としていながら，その内実たるやわからない。

JP●それは何故だかわかるかい？ ロン・カーターは生徒であって，僕は先生だからだ。ロン・カーターは人から学んだけれども，僕は，みずからそれを作ったんだ。さっきもいったように誰のように弾こうとかなんて考えたことない。ただただ弾くしかなかった。そして長いこと弾いてくることによって，それがうまくなってきてるってことはあるかも知れない。今，世界中に僕よりベースをうまく弾ける人はいない。演奏は僕にとっては，心臓の鼓動と同じように自然のことなんだ。心臓の鼓動がナチュラルに4分音符をきざみ，それをもっと細かくきざんでいけば8分音符になるという具合さ。それにハーモニクスが何故美しくきこえるかといえば，それは自然の法則にのっとっているからなんだ。7つの音があるよね，それは光がプリズムを通ると7色に分解するのと同じように変えられない自然の法則なんだ。

●そのうち僕のベース・ソロの譜面集を出すからね

MH●僕の知ってる限りでは，あなたがはじめてレコーディングしたのは，アイラ・サリバンと一緒だったと思うんだけど…。

JP●いや，最初のレコードは，僕のソロのアルバム「ジャコ・パストリアスの世界」だ。実際に最初にレコーディングしたのは，リトル・ビーバーのレコードなんだ。リトル・ビーバーっていうのは，マイアミ出身のすごくいいR＆Bのアーティストなんだけど，僕はその一曲だけ，〈I Can Dig You Baby〉っていう曲のレコーディングに参加した。この曲は，でも誰も聞いてない。

MH●ところで，僕は今日あなたの入っているアルバムを全部持参したんだけど，このポール・ブレイのレコード「ジャコ・パストリアスとの出会い」(日本フォノグラムRJ-7145) やったのはいつ頃？

JP●4，5年前かな。最初にレコーディングしたレコードだけど，出たのは最初じゃない。それにこれ僕のレコードじゃない。ポール・ブレイのリーダー・アルバム。これは完全な海賊盤だよ。ポール・ブレイとはいい友達だけど，彼はこのレコードの件で訴えられるよ。このレコード最悪だよ。

MH●これについては，おかしいと思ってた。ジャコの即興とかジャコのアイディアをポールが自分の作曲のようにクレジットしちゃって，虫のいいレコードだって気がしてたんだ。

JP●そうなんだ。確か4，5年前だったと思うけど，覚えてもいないよ。僕達ニューヨークにいて，ほんの一時間ぐらいスタジオにはいった。そこでテープがまわっていたというわけ。金は一銭も払ってもらってないし…。僕がウエザー・リポートにはいってから出されたんだ。しかもアメリカじゃ，このアルバムのジャケットの表紙には，僕の演奏してる時の写真がのってるんだぜ。僕は訴えるつもりだ。時間があればね…。裁判で決着つける。

MH●作曲のクレジット見たり，録音も古いものだろうとも思ったから，何かうさんくさいものを感じてた。

JP●そうだよ。実際に「音楽」やってるのは僕だけなのに…。

MH●そのうさんくささにもかかわらず，僕は何しろジャコのやってるものを見つけられて嬉しかった。

JP●このアルバムのタイトルを“In Spite Of (～にもかかわらず)”にすべきだな。(笑)

ADLIB●日本でのタイトルは「ジャコ・パストリアスとの出会い」で出されてる。

JP●僕のげんこつと出会うことになるよ。(笑)

MH●僕はあなたを研究するために，ウエザー・リポートの「ヘビー・ウエザー」(CBSソニー 25AP-357) の最初から最後まで，ジャコのベース・ラインをフル・コピーした。

JP●最後の曲〈ハボナ〉の音とれた？

MH●テープを遅くしてやったりしたけど，一箇所だけ，わからない所があった。低い音…。

JP●今，僕の本を出そうと思っている。僕がこれまでやったすべてのソロのすべての音を譜面においている。だから君がアメリカに来たら，そのコピーあげるよ。そしたら持ち帰って一音残らず覚えられるだろう。しかも僕の直筆の譜面のコピーだぜ。

MH●くれるのはうれしいんだけど，僕コピーはしたものの実際には弾けない。

JP●誰も僕のように演奏できないよ。心配するなよ。それに僕だって全く同じようには演奏できないし…。(笑)

MH●でも，だからあなたをアメリカまで追っかけてって，何とか演奏をものにしたいんだ。

JP●誰も僕のように弾けないっていうのは冗談だよ。今の時点では誰もできないってこと。だけどみんな弾けるようになるよ。君がその最初の人になるといいよな。

MH●いや，しかし…。

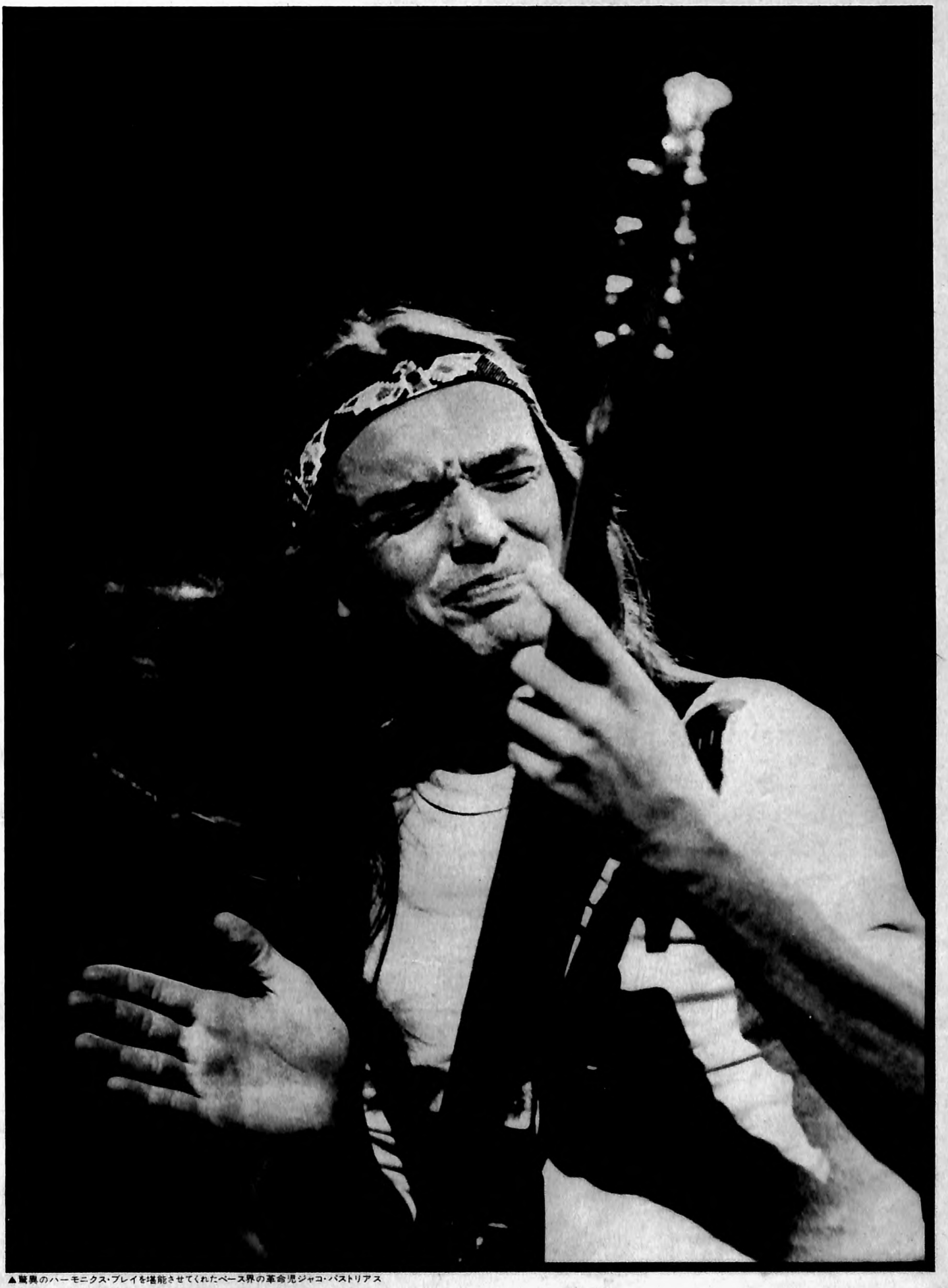
JP●僕が手つけてるさっき言った本だけど，どうやって演奏したか思い出したり，研究したりしなきゃなんないことたくさんあるんだけど，フィンガリングも載せるつもりなんだ。

MH●それは最高。是非やってほしい。

JP●そうすれば役に立つはずだ。

MH●右手も左手も書いてほしい。

JP●いや，右手については前にも言ったけど全く覚えてない。ごく自然に弾いてるだけで，右手の



▲驚異のハーモニクス・プレイを堪能させてくれたベース界の革命児ジャコ・パストリアス

▶
ステージ狭しと動き回ったり飛びはねたりする
エンタテイナーとしての才能も満ち溢れているジャコのステージ
ジャコのステージ・アクションにファンは大喜こび。

JACO'S DANCE

▲来日中だったチャック・レイニーとナイト・クラブでバッタリ!!若きベース・プレイヤーとベテラン・ベース・プレイヤーのクロスオーバーだ

こと考えないんだ。左手はわかるけど…バイオリン奏者と同じだよ。

MH●弦楽器にとって一番の謎は，その右手だと思う。

JP●謎だよ。だから僕にもわからない。(笑)

MH●だから，それを知るには，ジャコの所にいって長いことあなたの演奏を観察するしかないよ。

JP●それは僕の今についても言えることだ。長いこと演奏してきてるから，今じゃ考えないでごく自然に弾けるんだ。今までに，数えあげても5度だよ，演奏をとめて実際にどう弾くかを考えたのは。

MH●その5度っていうのが，僕にとっては大きなヒントになると思う。

JP●それを又演奏した時に思い出すだろうけど，そういう瞬間を切り出してきたようには，覚えていない。

MH●それはわかる。要するに楽器っていうのは理屈じゃなくて感触だからね。

JP●あ，一つ思い出した。「ジャコ・パストリアスの世界」の中の〈ドナ・リー〉…。

MH●あれは，むずかしい。

JP●最後の所だ。歌の部分の終りの所。どうしてもピックできなくてスラーしなくちゃならなかった。すぐ次に上に弾いていく所があってそれは全部音をピックしなきゃならなかったから…。何しろそこでスラーしなきゃならなかったんだ。もう4年も前のことだから，よくは覚えてないけど…。

●僕のコード・チェンジは超通常なんだよ。わかるかな?

MH●〈ドナ・リー〉の曲では，半分ぐらいコピーしたんだけど，途中でこれは気が狂ってると思ってあきらめちゃった。

JP●みんな書いてあるよ。心配するなよ。〈ドナ・リー〉の曲のメロディーの所だけだって，どうやって指を使ったかを完全に思い出して書きとるのに2年かかった。左手のことだけど……難しい曲だよ。昔，アイラ・サリバンとこの曲よくやったけど，すごーく早く弾いてたもんだった。

MH●僕は，テーマが終ってピーンとあがるあそこの箇所を聞いて，これはもう普通じゃないと思ったよ。

JP●僕，普通じゃないよ。(笑) EベースでBフラット13の所の音だろ。あそこにはみんなノック・アウトされてる。

MH●あなたがコード・チェンジする時には，通常のコード分解じゃないような気がするんだけど…。

JP●僕のコード・チェンジは超通常なんだ。僕みたいにストレートにチェンジを弾く奴はいない。ハービー・ハンコックとかジョー・ザビヌルとかキーボード奏者だけが，僕よりうまいコード・チェンジのできる人達だ。あと多分，チャーリー・パーカー(モダン・サックス奏者)にジョン・コルトレーン(モダン・ジャズ・サックス奏者)ぐらいだと思う。僕のコード・チェンジは，とにかく超正調というか，こんなに正しく弾く人いないんじゃないか。一つのメロディーの中にも多くのメロディーがあって，僕は上にも下にも自在にコード・チェンジしていけるんだ。僕の本が出てきたらわかってもらえると思うけど…。すべての個々のメロディーにコード・チェンジがあって，それはあたかもベートーベンやバッハのように，完全な間違いのないものだ。そんなふうにチェンジが弾ける人はいないよ。しかもベースでだ。

MH●もうそれは充分に感じてる。だからアメリカにいってあなたの演奏を勉強したいんだ。

JP●歓迎するよ。誰も家に招待したことないんだけど…。

MH●ありがとう。ところで話は違うけど，あなたのいろいろなレコード聞いて，ベースの音質に

変化を感じるんだ。その中で一番美しい音質だと思ったのは「ヘビー・ウエザー」なんだけど，これはどんな録音方法をとった？

JP●レコーディングをはじめたのは，ほんのここ2年前ぐらいだから，よくなってきてるってことだけだよ。例えば，僕のソロ・アルバムだって「ヘビー・ウエザー」のような音質が出せたのかも知れないけどミックス・ダウンに僕はコントロール持ってなかった。しかもはじめてのレコードだったしね。「ヘビー・ウエザー」では僕はプロデューサーの一人だったからサウンドをコントロールできた。今やりたいと思ったけど，この最初のアルバム「ジャコ・パストリアスの世界」をミックスし直すんだ。もしオリジナルのテープが残っていればだけど…。そうしたらみんなビックリするものできるよ。このソロのアルバムでいいのは，いや音楽としてはすでにすごくいいものがはいっているんだ。この当時の他の誰よりもいい音楽だ。サウンドとしては，全く僕の音になってたかっていうとそうじゃない。だけど，このソロ・アルバムが完全なるミックスじゃないから，だから僕のその後のアルバムで成長してるように聞こえるってのはいいよ。

MH●このアルバムで特に好きな曲は，〈コンティニューム〉だ。

JP●〈コンティニューム〉ってのは，公演旅行中のバスの中で書いたんだ。わかるだろ，旅の連続って感じ。曲の話で思い出した。一つスクープさせてあげる。こんなことまだ誰にも話してないんだけど，今度僕が次のソロ・アルバム（'79年1月に発表の予定）をつくる時に，僕は〈JohnとMary〉という曲を入れる。僕の子供達の名まえなんだ。〈コンティニューム〉を書いたのと同じ日ぐらいに書いた。感じ似てる。昔はこの二曲を一曲として続けて演奏してた。しかもベースを弾きながら歌うつもりなんだ。

MH●ジョージ・ベンソン風だね。(笑) あなたってメイジャー7というコードに対するセンスがすばらしいと思うんだ。

JP●答は簡単だよ。楽しいからさ…。

MH●大学でベース教えてた時のカリキュラムは？

JP●マイアミ大学は，クラシックとジャズのすごくいいカリキュラムを持ってる所で，僕自身は音楽学校なんて行ったことなかったけど，そこでは，ベースと一般音楽理論とビッグ・バンド用作編曲を教えるのが僕の仕事だった。僕はすごくいいビッグ・バンド・ライターだ。

MH●ベースでは具体的に何を教えたの？

JP●実をいうと，この時の経験は，僕の人生の中で最も退屈なものだった。学生達は，何しろバカだった。ほんとに時間無駄にしたよ。ただ一つよかったといえば，当時いい曲が書けたってことぐらい。僕の生徒の半分は，開放弦の名前も知らなかったんだぜ。大学だよ，大学！悲しいことだよ。実際にクラスでは音のチューン・アップの仕方とか，弦の名まえとか，そんなこと教えなきゃならなかった。最悪だよ。クラスには22人～25人の生徒がいたけど，その中で，そうだなー，4人だけだ，音楽を弾けたのは。残りは，靴のひもの結び方を教えなきゃならないような感じ。

●ベースの練習にはチェロの教則本を使うといいよ

MH●それでは「ヘビー・ウエザー」にもどって，この中で僕は，あなたの作曲した〈ティーン・タウン〉という曲がすごく好きなんだけど…。

JP●いい趣味だね。(笑)

MH●その録音方法を推測すると，デジタル・ディレイをかけてとったものと，オリジナルのベースの音をミックスしている様だが…。

JP●〈ティーン・タウン〉で？ いや全然違うよ。

MH●どうやったの？

JP●僕はまずドラムを録音して，それからベースをかぶせただけ…。何故二本のベースが聞えるかっていうと，僕と同時に，ジョー・ザビヌルがオーバーハイム・シンセサイザーでベースのパートを弾いてるんだ。

MH●ああ，そうだったのか。

JP●そして僕がミックスした時に，僕のベースの音をジョーのよりずーっと大きくした。そうしてジョーのベースがあたかも何本かのベースでやってるような音を出す効果をあげた。この僕とジョーとのベースのパートの録音は一回で終った。

MH●コード・チェンジは？

JP●基本的には4つのコード・チェンジだけで，C7，A7，F7，D7。曲の終りも全く同じ。ただ移調して，E7，Cシャープ7，A7，Fシャープ。

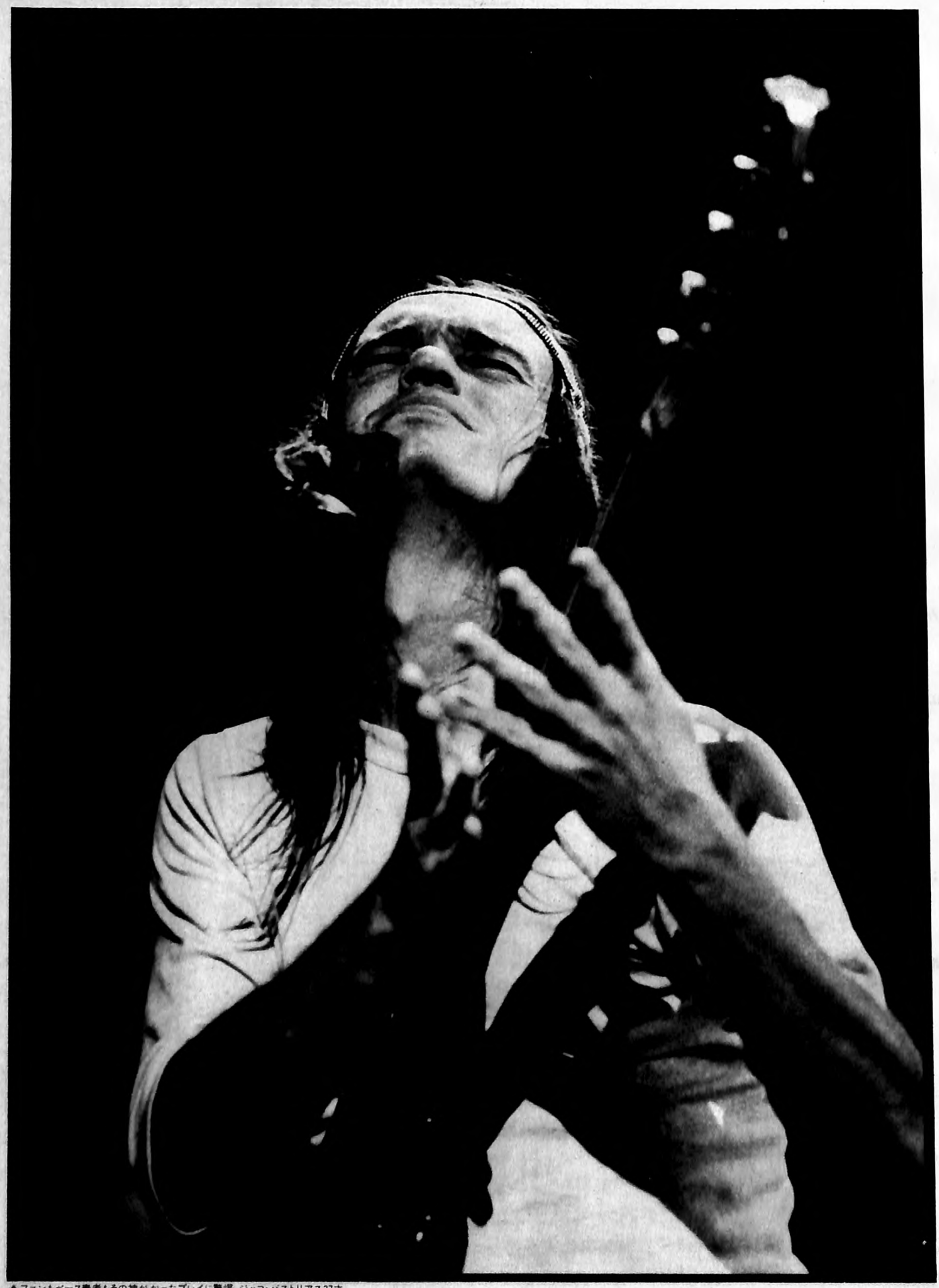
MH●そんなにシンプルな理路整然としたものだと思わなかった。

JP●「ヘビー・ウエザー」の楽譜本がもうアメリカで出てるから見てごらん。ただその中に何ケ所かまちがってる所がある。その本をフロリダの家に持ってくればそういう箇所を直してあげるよ。

MH●ありがとう。

JP●そういえば，〈ティーン・タウン〉は実際にあ

▲ライブ・ハウスでバッタリ!!左より渡辺貞夫，ジャコ，浜瀬元彦，増尾好秋の面々



▲ファンもベース奏者もその神がかったプレイに驚愕。ジャコ・パストリアス27才。

◀初リーダー作
「ジャコ・パストリアスの世界」

▶ウエザー・リポートのヒット作
「ヘビー・ウエザー」

る町の名だって知ってるかな？　その近くに今住んでいる…。13の頃には，よくティーン・タウンに踊りにいった。週末に18才以上お断わりのダンス・パーティーが開かれた。

MH●ところでストリング(ベース弦)をどのくらいの周期で変える？

JP●週に一度で変えたいんだけど，高くてやってられない。

MH●ロト・サウンド・スイング・ベースの弦だね？

JP●そうだ。

MH●この弦に出会うまでに，どれだけいろんな弦をためしたことか…。

JP●僕だって全くその通りだ。この弦を8年前に見つけたんだけど，それ以来これ以外を求めようとも思ってない。ただ一つ問題なのは，これをだまらしておくってことができないんだ。

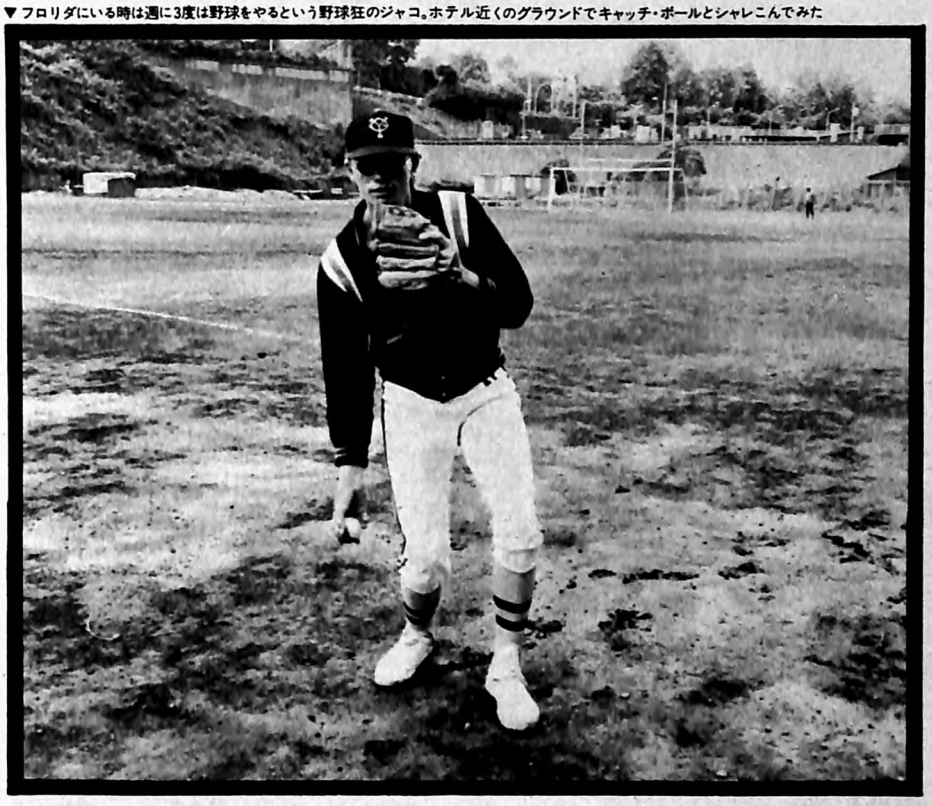
▲本誌編集室を訪れた"ベースの達人"もこの日ばかりは鬼編集長に変身!!"ジャコのグラビア頁はどうなってるんだ"とガナっているつもり

JP●〈ドナ・リー〉を練習してた時なんて，僕は指をどうやって完全にあげて次の音に行けるかってことだけを練習したよ。

MH●弾かなくても，つまり高音弦だけ弾いてても低音弦が鳴り出すんだよね。

JP●そう。だから右手の親指，薬指，小指の三本は音を出さずにおさえておくのに使って，残りの二本，人差し指と中指だけで演奏するんだ。それから左手ももちろん弦を静かにさせておくってことに使ってる。

▼フロリダにいる時は週に3度は野球をやるという野球狂のジャコ。ホテル近くのグラウンドでキャッチ・ボールとシャレこんでみた



MH●だけど，右手の三本で弦を静かにさせておくっていうのはむずかしいテクニックだね。

JP●でも僕考えてないんだ。ただやるだけ。

MH●もう一つ，あなたはペンタトニック（5音階）の解釈がすごくおもしろいと思う。

JP●ユニークな耳持ってるね。

MH●例えば〈ハボナ〉とか…。

JP●〈ハボナ〉はペンタトニックの傑作だ。

MH●僕もそう思う。ペンタトニックの解釈に何か特別な哲学持ってるの？

JP●ペンタトニックに対する僕のフィロソフィーは一つさ。つまりペンタトニックは5つの音だよね。だから僕はリズム的にも5を基調にしたらいいんじゃないかと考えた。この5のリズムを5つの音にあてていくというコンビネーションを聞いてもらってるんだと思う。

MH●それとあなたのペンタトニックはすごくハーモニックに使っていると思う。

JP●もちろん。いろいろやり方はあるけど，音程は6度の開きが好きだ。でもこれは単にアイディアの一つであって，演奏する時にいちいち考えてないよ。だけど頭はくたびれる。

MH●ベースの練習の時にチェロの教則本を使ってると聞いたが…。

JP●「DOTZAUER」の113 STUDIESを使っている。

MH●そのどこを特にやったの？

JP●4冊に別れてて，僕の一番好きなのは，第二冊目。第四冊目はベースで弾くなんて不可能だよ。各音各音が連音符なんだから…。第四冊目は忘れていいよ。

MH●最後に，ベースという楽器に何か理念を持ってるとしたらそれが何か教えてほしい。

JP●ベースという楽器に持っている僕の理念は一つ。それはJACOさ。それだけ。僕は自慢して大ぼらふいてるんじゃないんだ。将来の真実を話しているんだ。

MH●どうもありがとう。

(インタビュー：浜瀬元彦　写真：有原隆 ADLIB編集部　協力：ユニバーサル・オリエント・プロ CBSソニー)

▼フェンダー・ジャズ・ベースのフレットレスとフレットつきの2本がジャコの愛用楽器だった